



福島県各地に、
全国から様々な形の応援が寄せられています！
そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。

福島へのラブレター



海外テレビ番組プロデューサー
クリスチャン・
ストームズさん

初めて福島を訪れたのは地震の後でした。初めて福島の良さを理解したのは、福島の県民に会ったその時でした。私が知っている福島はテレビで見せておる原発現場ではありません。僕が愛している福島は、福島に住んでいるALL OF YOU(あなたたち)、ボランティアセンターで活躍している方々の笑顔です。責任感の強い日本人のあなたたちに言いたいことは、あなたのせいじゃなかったですよ。地震のせいでした。津波のせいでした。「福島頑張ろう！」皆が言っていることですが、私の視点から見ても日々頑張っているように思います。



立川市社会福祉協議会
市民活動センターたちかわ
小林 郁義さん

福島県には3月末に相馬市、5月と6月にはいわき市へのボランティアバス担当として関わらせていただいている。活動を通して、多くの「つながり」ができました。今は、福島へ足を運ぶことが難しい状況ですが、大好きになった福島やそこで暮らす方々に起こったことを「忘れず」、多くの人に正確な情報を「発信」するなど、福島応援団の一員として、今できることを「継続」していきたいと思います。

リレーエッセイ

ラジオのススメ

詩人 和合 亮一



震災直後、一番の情報源はラジオでした。3月11日の夜は、車の中で一夜を明かそうと思いました。暗闇を見つめながらずっと聴いていました。体験したことのない大きな災害に半ば茫然としながら、公民館の駐車場でスピーカーからの声を頼りに気持ちを励ましていました。アナウンサーの方は時折に涙ぐんだりしながら、懸命に情報を伝えてくれました。耳を傾けることで、なんとか落ち着きを保つことが出来ていたように思います。

それからはラジオというメディアをあらためて信用し、傍に置くようになりました。強い余震に見舞われた時にも、震度や被害はどうだったか、すぐに確認しました。気が滅入って落ち込んだ時も、モンモンとしてしまうのを意識的に避けるためにスイッチを入れました。ラジオはどこかへと一瞬にして連れ出してくれました。家から一歩も出られない時に、外の世界への窓口のような役割を果たしてくれていたのです。

今も、原稿を書こうとして初めが出てこなかったり、書き進めていてふと考へが止まってしまったり…、そういう時にはスイッチを入れます。しばらく耳を澄ませて、後は音を低くしたり消したりして、それから書き出します。何かを感じたり、物を考えたりする時の心の準備が、こうすることできちんと出来るように思うのです。執筆への切り替えの瞬間を見つけることが出来ます。だからいつもラジオは、書斎の机の隣にあります。

講演や取材などの仕事の関係で、ホテルで過ごすことが時折あります。実は旅先の枕ではなかなか眠れないタイプなのです。夜に部屋のテレビを見ていても、なんだかあんまりくつろげません。それでは…と探してみると、最近のホテルにはベッドの脇にラジオが設置されていない部屋がとても多いのです。それであらかじめ、小型ラジオを持っていきます。その土地の放送を聴いているうちに、静かな気持ちになって、眠りに就きます…。

人はそれぞれに周波数のようなものを持っていると思います。そのことをラジオは私たちに教えてくれます。番組を探して周波数を合わせていると、自分自身を探しているような心持ちになります。見つけたと思った瞬間に、私たちに、新しい時間を約束してくれるのです。大変な震災の時を、今も私たちは過ごしています。だけどこでお互いに〈周波数〉を見失わないで、共に福島というふるさとを見つめていきたい…と願っています。

[プロフィール]
和合 亮一(わごう りょういち)

1968年福島市生まれ。国語教師。第1詩集「AFTER」(1998)で第4回中原中也賞受賞。第4詩集「地球頭脳詩篇」で第47回晚翠賞受賞(2006)。日本経済新聞誌上等にて「若手詩人の旗頭的存在」と目される。震災以降、福島からTwitterにて「詩の礫」と題した連作を発表し続け、大きな反響を呼んでいる。※アカウント(@wago2828)。2011年6月、これらの作品群を、「詩の礫」(徳間書店)、「詩の黙札」(新潮社)、「詩の邂逅」(朝日新聞出版)として3冊同時出版。同年、PROJECT FUKUSHIMA!を立ち上げ、8月15日、福島の今を見つめ、世界に発信する世界同時多発イベントを開催。坂本龍一のピアノ、大友良英のギターと共に演。

ボランティアの皆さんへ

3.11から半年。ボランティア活動者は11万人を超えた！

—福島県内の災害ボランティア活動状況報告—

3月11日の大震災の日に、福島県社会福祉協議会ボランティアセンターは開設されました。その3日後、福島県災害ボランティア連絡協議会により[福島県災害ボランティアセンター(事務局:県社会福祉協議会)]が設置され、現在に至っています。市町村災害ボランティアセンターも1ヶ月以上の期間をかけ設置されており、県内には9月11日現在、33市町村において災害ボランティアセンター、住民生活の復興に向けたボランティアセンターが設置されています。

発災以降、瓦礫の撤去、泥だらけ、遺留品の洗浄、避難所支援、支援物資の仕分け、仮設住宅への引っ越しなど、さまざまな支援ニーズを調整し、活動を紹介してきました。避難所支援の中には外で遊べない子どもたちのために、託寺ボランティアとしてお寺を開放して受け入れていただくなど福島県ならではの活動もありました。

半年間のボランティア活動者数は延べ11万1,433人。5月の連休の頃からは県外から多くの人たちが参加してくれたことがわかります。(表1)

避難されている皆さんの生

活の場が、応急仮設住宅(民間アパート借り上げ、公営住宅を含む)などへ移行している今、ボランティアに支えて欲しい支援ニーズや求められる活動の内容は変化してきています。県外から駆けつけてくださったボランティアの皆さんのが継続的に福島を訪れ、その時ごとに必要な活動をされる重要性はもちろんのこと、慣れない地域での新しい暮らしの不便や困りごとを気軽に手伝ってくれる近隣のサポートや、移転して知り合いがない、新しいつながりができるなど、周囲から孤立した状態に置かれてしまうことがないように、誰もが集まる場づくりや仲間づくりのサロン活動など、住民同士が力を出し合っての助け合い活動なども求められます。身近なところでのちょっとしたボランティア活動が増えていくといいですね。

月	県内	県外	計
3月(12日から)	1,5 596	438	1,6 034
4月	1,4 917	6,034	20,951
5月	1,2 245	18,387	30,632
6月	8,923	11,843	20,766
7月	5,659	8,614	14,273
8月	2,735	5,114	7,849
9月(11日まで)	2,63	665	928
合 計	60,338	51,095	111,433

*ボランティア活動者数については、市町村災害・復興ボランティアセンターを通じて上がってきた数値から算出しております。

ここにちは、生活支援相談員です！



統括生活支援相談員
渡部 ひとみ

生きて、生かされて、生きぬいて。支え、支えられて、支えあって。あわてず、あせらず、あきらめず。疲れたら休んで、肩の力を抜いて。あらゆる方々に助けて頂きながら、今ここにある、

ささやかな幸せを忘れず、皆様のそばで歩んでいきたいと思っています。



統括生活支援相談員
佐々木 昇美

人は誰もひとりでは生きてゆけません。今回の震災で家を失い、故郷に戻れない人々が各地の仮設住宅で色々なコミュニティを持ち暮らしてあります。そんな人たちが暮らしている仮設住宅を一軒一軒訪問し、現在の不安、不満を聞き取り、その解消に向け全力で立ち向かっているのが生活支援相談員です。そんな仮設住宅に住んでいる人たちが、自分の望んでいる未来に進められるようお手伝いをしたいと思います。

編集後記

震災から半年が経過。各テレビ局では特別番組を組んで被災地の状況を伝えていました。さまざまな課題は山積みですが、みんなで元気を出して、前を向くことが大切ですよね。(村島克典)

最新情報はホームページで

ご覧ください！

<http://www.pref-f-svc.org>



がんばろう、日本。
がんばろう、東北。

がんばろう、福島。

次号は10月17日発行です